

17章冒頭は、イエスが弟子たちに言われた、で始まります。そして、イエスは『つまりきは避けられない』といきなり言います。この世で生きるとき、私たち人間にとってつまりきは避けられない、と云うのです。そして、そのようなつまりきを与える者は災いだということです。そればかりか、つまりきを与える者は、首にひき臼を懸けて海に投げ込まれた方がましであるということです。このように1〜2節では、自分が他人につまりきを与えることについての戒めの言葉でした。

さらに、3〜4節では、つまりきを受けた被害者になったときのことを言っているのです。もし、兄弟姉妹があなたに対して罪を犯したら戒めなさい、と言います。そして、つまりきを与えた人が戒められて悔い改めたならば、赦してやりなさい。1日に7回つまりきを与えたとしても、7回悔い改めまると言って謝って来たならば、赦してやりなさい、と云うのです。

私たちは日常において、よく、「しびました」と言いますが、おもむき「しびました」、自分がつまりきを受けたことはよく覚えていますが、逆に、つまりかせたことはほとんど覚えていません。傷を受けたことは覚えていても、傷を与えたことは忘れていきます。ですから、イエスはつまりきを与えることに対して強く警告しています。

当時のユダヤ教の常識で言えば、3度赦してあげれば、あなたは完璧です、と云われていた中で、イエスは7回まで赦してやりなさいと言っているのです。「仏の顔も三度まで」という言葉があります。7度も赦してやるというのは、実際にはありえないことです。一日に7度も罪を犯すようなことが繰り返されたとしても赦せということは、それまで6度も反省なく同じ罪を繰り返してきたことがわかります。ですから、仏のように寛容な者も同じことを繰り返されたとしたら、それを三度以上繰り返されたら、仏の顔をして赦すことができなくなるということわざです。私たちの常識で言っても、三度までは赦すことはあるかもしれないというのが正直なところでしょう。

それをイエスは7回まで赦しなさいと言っています。それは、つまりきを与えることを人間は忘れてしまいがちなので、つまりきを与えた者が悔い改めたならば7回まで赦しなさい、と云うのです。これは、私たち人間が日常生活で、いかに多くのつまりきを他人に与えているかという現実を踏まえてのことなのです。

イエスはここで弟子たちに人間関係でのつまりきについて加害者であっても被害者であっても、そのいずれにおいても注意すべきことについて警告しています。私たちにとって人間関係はどしんどいものはありませんが、現代の若者はこの人間関係において優しい人物たちだという印象が私には強いのです。

現代の若者の川柳に「教室はいわば隠れた地雷原」というのがあります。つまり、教室での人間関係は、地雷がどこに敷設しているかわからないので、その地雷を踏まないように、人間関係で摩擦を避けて生きてくという処世術を生み出す学校での生き方のことを表現した川柳なのです。

ですから、現代の若者が人間関係でつまずきを与えることは稀れなのです。正面切って、意見を戦わせることも少ないのです。摩擦を避けているわけですから、つまずきを与えることは少なくなるわけです。けれども、摩擦を回避して、本当に強い人間関係の絆を作り上げることはできないと思います。

このように考えてくると、つまずきを与えるにしても、つまずきを受けてしまうにしても、もしつまずきがなければ、強固な人間関係を取り結ぶことができないのではないかと思うのです。摩擦を回避して強固な人間関係を取り結ぶことはできません。

ということは、つまずきを与えたとしても、そこで悔い改めて赦していくことで、つまずきを乗り越えて、人間関係を構築する道が開かれていくということがわかります。

イエスは、7回悔い改めます、と言って赦しを求めてきたとき、赦してやりなさい、と言います。7回も罪を犯しても、その人物が悔い改めたならば赦せとイエスは言うのです。そこで、弟子たちは自分たちが果たしてイエスが言うように、7度赦すことができるとは思えなかったでしょう。だから、5節にあるように、『わたしどもの信仰を増してくださう』と言ったのです。7度赦すことができるような強い信仰を与えてくださいと願ったのです。

すると、イエスは『もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、「抜けて出して海に根を下ろせ」と言っても、言うことを聞くであろう』と言ったのです。からし種というのは、肉眼で見れば粉末のような小さな種で、土に蒔くときは地上のどんな種よりも小さなものなのです。ところが、成長するとどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に鳥が巣をつくることのできるような枝を張るのです。このようにイエスが言うことは、弟子たちからし種のような信仰もなかったのでしょうか。そうではありません。弟子たちにはちゃんと信仰がありました。けれども、信じる対象が違ったのです。「7度も赦すことなどできない」と言って、実は自分自身のことを見つめて7度も赦すことなどできないと考えたのです。

この時の弟子たちはイエスを信じていたではなく、自分自身の信仰を見ていたのです。イエスがガリラヤ湖の嵐を鎮められたように、目の前の桑の木を海の底に根付かせることができるのです。そのイエスにいうことに自分の信仰的革新を委ねないで、自分個人の信仰の力量では7度赦すことはできないと勝手に判断してしまい、イエスが自分たちと共にいて信仰を力づけてくださることに委ねることができなかったのです。

イエスを信じることで、私たちは自分一人の力ではできないことも、神の助けを得て、実行することができるのです。自分の信仰を見ると、からし種のような小さな粒ですが、そのからし種一粒の信仰があれば救われるということをここで、イエスは言っているのではなく、からし種一粒のような自分の信仰によって、実際にできるできないという人間的な判断をするのではなく、どのような逆境の時でも、からし種一粒のような自分の信仰の姿しか見えないようなときでも、いつも自分に寄り添ってくださるイエスの励ましを受けて歩み出すのだという気概をわすれずに、今日も信仰の歩みをイエスに見守られながら進めていきたいと願うものです。